

# 住文化研究の方法論的考察（その1）

岡田知子・富樫 穎

## A methodological Study on Housing-culture (Part I)

TOMOKO OKADA and SATOSHI TOGASHI

### 1. はじめに

現代社会における価値観の多様化は住生活にも及び、住宅の間取り、外観・インテリアなどについても多様化が進んでいる。住宅研究の分野ではこれらの多様化現象を扱うものが少なくないが、それらの多くは住み方研究を中心とする方法によるもので、個別的な多様化現象の把握にとどまっている。しかしながら、個々の多様化現象に眼を奪われていたのでは、多様化現象の本質を理解することができない。すなわち、多様化現象の理解のためには、個々の多様化現象をなんらかの関係ある一つの文化類型として把握するという観点が必要である。

以上のような観点から、本研究は、住空間と住生活の文化的側面に着目して、多様化する住文化の類型化を試み、あわせて近い将来の社会へ向けてその動向・問題点等を探ろうとするものである。

本研究では、居住者の①外観及びインテリアについての評価、②接客及びプライバシーからみた空間の分離・結合関係についての志向性、③間取りの型についての志向性、④住宅内外の各種構成要素（神棚、床の間、吹き抜け、芝生など）についての志向性、の各要素間になんらかの文化的関連があるものと考え、それらの定量的解析を重ねあわせて住文化の内容を説明しようとするものである。

外観及びインテリアについての評価は、個人ないし家族が住空間の表現を通じて社会に対して示す文化的態度の現われとみることができる。また、間取りの型及び空間構成要素についての志向性は、住空間と住生活の両方にかかわる文化的態度の現われとしてみることができる。したがって、これらの構成要素の間にあるいくつかの文化類型を抽出できる可能性があり、それをもって住文化

の類型化が可能になると考えられる。

しかしながら、現段階では、住文化の概念や研究全体の枠組みが十分に固まっているわけではない。とりあえず、住文化の概念を上記のように規定し、人々の住空間の評価と住生活の志向性からみた住文化の類型化が可能かどうかを検討する段階にある。したがって、仮にいくつかの住文化類型が抽出されたとしてもそれらがどのような外的条件に規定されているかの検討は、次の段階の研究課題として考えている。

また、調査内容が多岐にわたるため、本編の段階では、上記①の「インテリアについての評価」と②の「プライバシー」については調査していない。この点についても次の段階の研究課題としている。

### 2. 調査の概要

#### 2・1 調査内容

##### 2・1・1 平面志向および来客の種類と頻度

図3に示す仮想平面（1階、いずれの部屋も私室にしないと仮定）を被験者に呈示し、間取りをどのように変えたいかをたずねた。選択肢は、AにBを続ける「独立続き間座敷」、BにAを続ける「居間連続続き間座敷」、Bを居間と一部屋にする「独立和室+大リビング」、AとBを居間と一部屋にする「特大リビング」、AとBを一部屋の独立した洋室にする「独立大洋室」、そのままでのよいとする「独立和室+居間連続和室」の6タイプである。本研究では、このような平面構成の選択傾向を平面志向と言うことにする。

次いで、客（親戚を除く）の種類を、家の客、父母の客、夫の客、妻の客、夫婦共通の客の5つに分け、それぞれについて来客の頻度（4段階）をたずねた。

## 2・2・2 外観認識

住宅の外観認識についてはすでに24例の外観サンプルについて写真とスライドの両方の提示方法で28対の形容詞句を用いたSD法による調査を行っており、その結果<sup>1)2)4)</sup>をふまえて、今回の調査では8対の形容詞句(図1)を使用し、調査の簡略化をはかった。

また、今回提示した外観サンプルは4枚の写真(図2)で、同じく調査の簡略化をはかっている。外観サンプルのしほりこみについては、上述の調査結果<sup>3)</sup>をふまえて、被験者によって外観認識パターンが著しく異なるものを選び出すという方法をとった。なお、写真とスライドの提示方法の差異についてもすでに検討済みである。

### 2・1・3 空間言語

神棚、床の間、吹抜け、芝生など、住宅の内外空間の構成要素(装置を含む)を示す24語に「家相」を加え、合計25語を用意し(表1)、理想的な住宅に必要だと思

表1. 空間言語

1. 神棚 2. 仏壇 3. いろり 4. 暖炉 5. 応接セット
6. 大テーブル 7. 床の間 8. 畳 9. 天窓 10. 吹抜け
11. 縁側 12. むれ縁 13. テラス 14. ベランダ
15. ホームバー 16. ホビールーム 17. プレイルーム
18. 茶屋 19. 築山 20. 芝生 21. 藤棚 22. 生け垣
23. 塀 24. 門 25. 家相

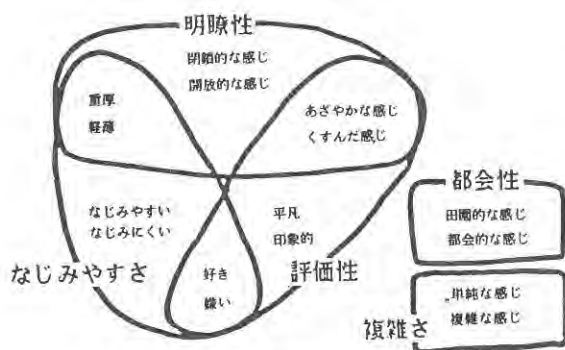


図1 形容詞対

われるものを被験者を選択させた。

これらの用語は、デザインヴォキャブラリーとかパターンランゲージとか言われているものを含んではいるが、それらの概念で表現することは必ずしも適切ではない。そこで、本研究では、これらの用語を「空間言語」と言うことにする。

なお、今回調査で用意した25語は〈伝統-近代〉の視点から選出しているが、現段階では、まだ十分に吟味したものではない。

## 2・2 調査対象

今回の調査対象は大阪市とその周辺に在住する一般の主婦に限定し、できるだけ年齢に偏りのないように選出された(表2)(表3)。

表2. 生年別被験者数

生年	昭和9年以前	昭和10-19年	昭和20-29年	昭和30年以降	計
人数	13	15	17	13	58

表3. 住宅別被験者数

		2DK	3K 2LK 2LDK 3DK	4K 3LK 3LDK 4DK	4LK 4LDK 5DK	5LK 5LDK 6DK	それ以上
持家	一戸建て	0	0	4	4	9	4
	中高層 集合住宅	0	0	1	1	0	0
	テラスハウス タウンハウス	0	0	0	5	0	0
借家	一戸建て	0	1	1	0	1	0
	中高層 集合住宅	1	16	0	0	0	0
	テラスハウス タウンハウス	1	0	0	0	0	0
	文化住宅	0	0	0	1	0	1
計		2	19	7	13	10	7



図2 外観サンプル

### 3. 結果と考察

#### 3・1 平面志向

##### 3・1・1 年齢階層別にみた平面志向

調査結果を平面志向別に年齢順にプロットした(図4)。これによれば、昭和10年代生まれでは「独立続き間座敷」と「居間連続続き間座敷」、昭和20年代生まれでは「独立和室+居間連続和室」と「独立和室+大リビング」、昭和30年代生まれでは「独立和室+大リビング」と「特大リビング」を志向する傾向がうかがえる。だが、各平面志向とも年齢にばらつきがあり、年齢階層の区分の仕方によっては別の見方もできる可能性がある。したがって、この点についてはより多くのデータをもとにして改めて検討を行う必要がある。

##### 3・1・2 年齢階層別にみた来客の種類・頻度

年齢階層別、客の種類別に来客頻度を数量化してその平均値を求めた(図5)。これによると、父母の客は各年齢階層ともほとんど来ない。夫の客は昭和10年以前生まれでは時々来るが、昭和20年代以降生まれではほとん

ど来ない。また、各年齢階層を通じて妻の客の来客頻度が高い。

年齢階層別の特徴をみると、昭和10年以前生まれでは妻の客、夫の客、夫婦の客が時々来ており、合計の来客頻度が他の年齢階層に比べて高くなる層であると考えられる。昭和20年代生まれになると夫の客はほとんど来なくなり、家の客も減少する。それに対して、妻の客と夫婦の来客頻度が高くなる。昭和30年代以降生まれでは夫婦の客が減少し、妻の客が主となる。

##### 3・1・3 平面志向と来客の関係

昭和10年代生まれが「続き間座敷」を志向するのは、家の客、夫の客が時々来ることに関係している可能性がある。昭和20年代以降生まれになると、家の客、夫の客が減少するので「続き間座敷」の志向性が弱くなるという解釈が成り立つ可能性がある。また、昭和30年代以降生まれになると、妻の来客(親しい客と推測される)が中心で、合計の来客頻度も少なくなるので「大リビング」ないし「特大リビング」の志向が強まるという解釈が成り立つ可能性がある。



図3 仮想平面

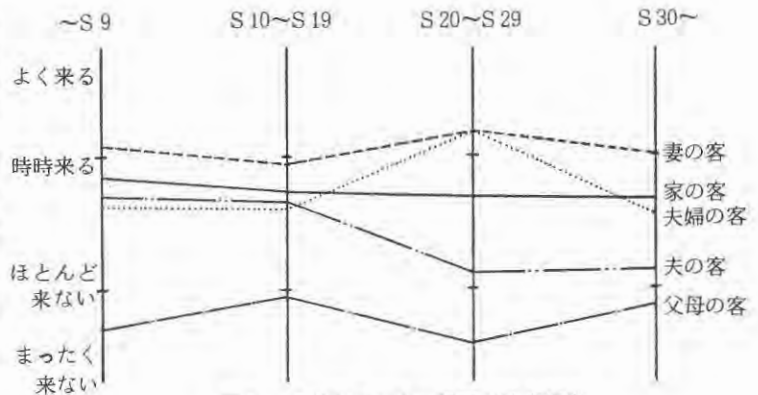


図5 年齢階層別客の種類別接客頻度

6 独立大洋室				○						
5 特大リビング						○		○		
4 独立和室+大リビング			○	○	○	○	○	○	○	○
3 独立和室+居間連続和室		○	○	○	○	○	○	○	○	○
2 居間連続続き間座敷	○			○	○	○	○	○	○	○
1 独立続き間座敷			○	○	○	○	○	○	○	○
	T	T	S	S	S	S	S	S	S	S
	5	15	30	20	30	40				

図4 平面志向別年齢順のプロット図

### 3・2 空間言語

空間言語を変数にして因子分析を行った結果、表4のような因子が得られた(第7~9因子は固有値1未満のため除外)。これによれば、第2因子を構成する「畳・縁側・生け垣」と「ホームバー・プレイルーム」は同軸線上の対立しあう空間言語であることがわかる。

#### 3・2・1 年齢階層別にみた空間言語選択傾向

年齢階層別に空間言語因子に対する因子得点の平均値を求めた(図6)。これによれば、「床の間・仏壇……」の因子得点は昭和10年代以前生まれで高く、昭和20年代以降生まれで低くなっている。また、「大テーブル」の因子得点は昭和1ヶタ以前生まれが他の年齢階層に比べて低くなる傾向がみられる。その他の空間言語因子については年齢階層別の特徴を読みとりにくい。

#### 3・2・2 空間言語からみた平面志向グループの特性

平面志向グループ(独立洋室志向は1例しか得られなかったため検討から除外)別に空間言語因子に対する因子得点の平均値を求めた(図7)。これによると、「床の間・仏壇……」では1グループ(独立続き間座敷志向)の因子得点が高くなっているが、3グループ(独立和室

+居間連続座敷志向)→2グループ(居間連続続き間座敷志向)→4グループ(独立和室+大リビング志向)→5グループ(特大リビング志向)の順に低くなっている。これに対して、「大テーブル」では、5グループ(特大リビング志向)の因子得点が高く、4→3→2→1グループの順に低くなっている。すなわち、「床の間・仏壇……」は「独立続き間座敷」志向になると因子得点が高く、「大リビング」志向になると低くなり、「大テーブル」とは逆に動きを示していることがわかる。

表4. 因子分析結果

	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
+	吹抜け テラス 芝生 プレイルーム	畳 縁側 生け垣	塀 茶室 門 暖炉	床の間 仏壇 神棚 家相	築山 藤棚	大テーブル
-		ホームバー プレイルーム				

因子負荷量0.4以上 固有値1以上

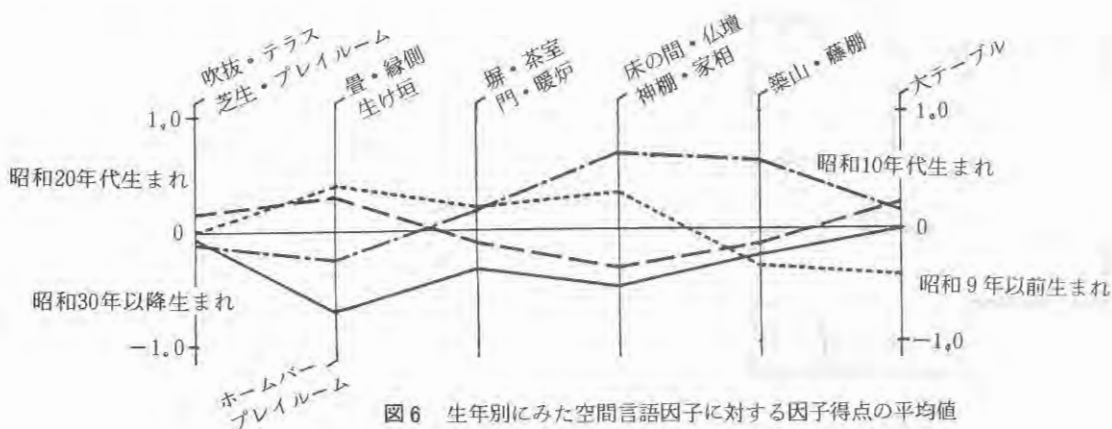


図6 生年別にみた空間言語因子に対する因子得点の平均値

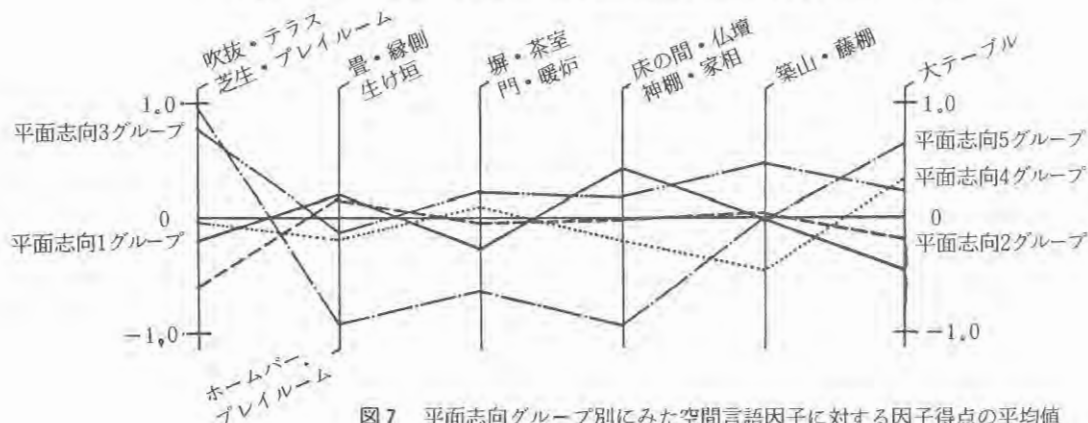


図7 平面志向グループ別にみた空間言語因子に対する因子得点の平均値



### 3・3 外観認識

被験者に4枚の写真(図2)を呈示し、形容詞対8対(図1)、7段階評価のSD法による調査を行った。図1に示すように、形容詞対を変数にした因子分析を行った結果、前述の調査結果<sup>1)2)4)</sup>とほぼ同様の因子が得られた。

#### 3・3・1 外観認識からみた平面志向グループの特性

4枚の写真について平面志向グループ別に形容詞対因子に対する因子得点の平均値を求めた(図8)。これに

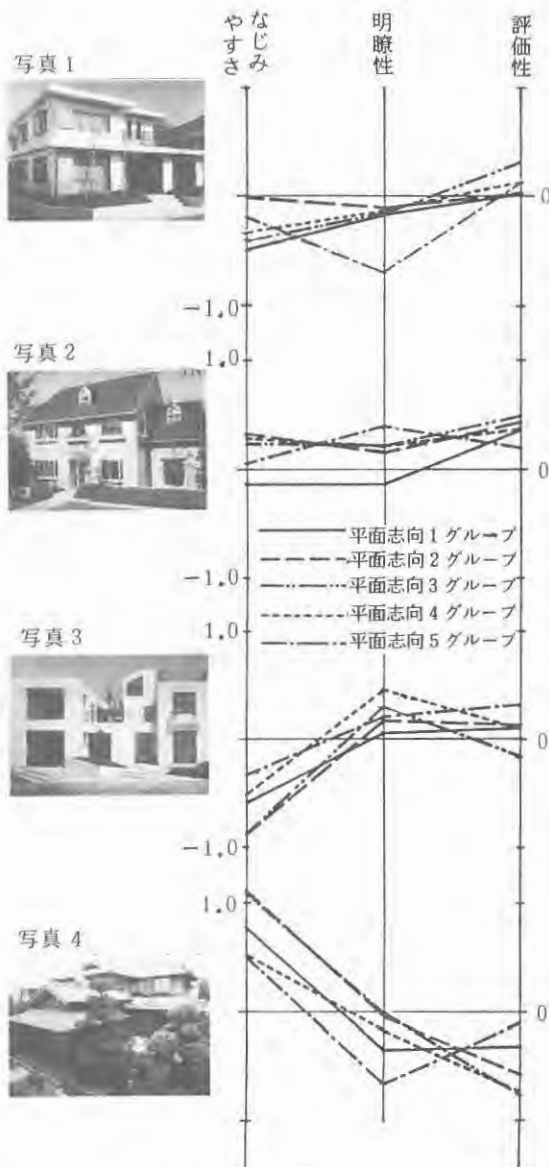


図8 平面志向グループ別、写真別にみた形容詞対因子に対する因子得点の平均値

よると、1グループ(独立続き間座敷志向)は他グループに比べて写真2の「なじみやすさ」「評価性」の因子得点が低くなっている。5グループ(特ダリビング志向)は写真1、写真4の「評価性」は低い、写真2では若干高くなっている。4グループ(独立和室+特ダリビング志向)は他グループに比べてきわだった特徴はみられないが、写真3の「評価性」が若干高くなっている。2、3グループ(居間連続続き間志向、独立和室+居間連続和室志向)は写真4の「なじみやすさ」が高い因子得点を示している。

#### 3・4 外観認識による被験者グループの類分けとその特性

外観認識による調査結果から被験者を変数にした因子分析を行って被験者を類分けし、年齢、平面志向、空間言語、外観認識からみた各被験者グループの特性について検討を行った。

なお、被験者グループの特性の検討にあたっては、被験者を変数にした因子分析で因子負荷量0.4以上の被験者が6人以上みられる4つの因子(すなわち4つの被験者グループ)について検討を行った。

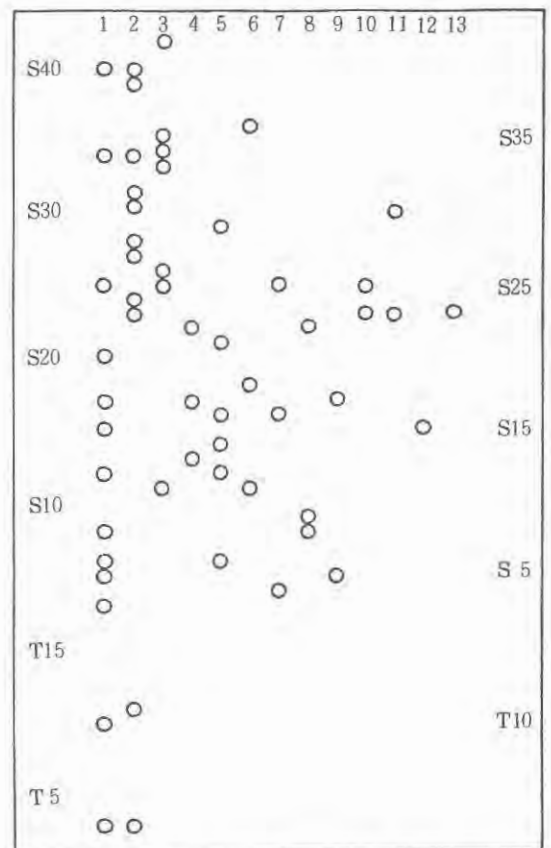


図9 外観認識による被験者グループ別年齢順のプロット図

### 3・4・1 年齢からみた被験者グループの特性

被験者を変数にした因子分析を行い、因子負荷量0.4以上のものについて年齢順にプロットした(図9)。これによれば、第1因子を代表する被験者グループでは、年齢にばらつきがあるが昭和1ケタ～昭和20年生まれまでに集まる傾向がややみられる。それとは逆に、第2因子を代表する被験者グループでは昭和20年以降生まれが集まっている(但し昭和1ケタ～昭和20年生まれを飛び越えて大正生まれもみられる)。第3因子を代表する被験者グループでも昭和25年以降生まれの若い世代が集まっている。第4、6～13因子を代表する被験者グループでは昭和10年代生まれを中心に被験者が散らばっている。

### 3・4・2 平面志向からみた被験者グループの特性

各因子(第1, 2, 3, 5因子)を代表する被験者グループの平面志向について検討を行った(表5)。これによれば、第1, 2因子を代表する被験者グループはともに和室を志向し、「特ダリビング」や「独立大洋室」を志向していない。しかし、両グループの間には続き間座敷の志向に違いがみられる。すなわち、第1因子を代表する被験者グループは「独立続き間座敷」を志向する

のに対して、第2因子を代表する被験者グループは「居間連続続き間座敷」を志向する。また、第3因子グループを代表する被験者は、「続き間座敷」と「居間連続和室」に対する志向性が弱く、「大リビング」ないし「特大リビング」を志向する傾向が強まる。なお、「独立和室+大リビング」は、どの被験者グループでも比較的志向性が強い。

### 3・4・3 空間言語からみた被験者グループの特性

被験者グループ別に空間言語因子に対する因子得点の平均値を求めた(図10)。これによると、第3因子を代表する被験者グループは「吹抜け・テラス……」「大テーブル」の因子得点が高くなっているが、「床の間・仏壇……」「畳・縁側……」については低くなっている。逆に「床の間・仏壇……」が高くなっているのは第1因子を代表する被験者グループである。また、第5因子を代表する被験者グループは「畳・縁側……」「築山・藤棚」が高くなっている。第2因子を代表する被験者グループは全体として因子得点に変化がみられない。

### 3・4・4 外観認識からみた被験者グループの特性

被験者グループ別、写真別に形容詞対因子に対する因子得点の平均値を求めた(図11)。これによると、第1因子を代表する被験者グループは写真4の「なじみやすさ」「評価性」の因子得点が他の被験者グループに比べて高くっており、写真2では逆に低くなっている。それに対して、第2因子を代表する被験者グループは写真2の「評価性」の因子得点が他の被験者グループに比べて高い。また、第3因子を代表する被験者グループは写真1, 4の「評価性」が他の被験者グループに比べて低い。また、第5因子を代表する被験者グループは写真1の「なじみやすさ」「評価性」の因子得点が他の被験者グループに比べて高い。

表5. 平面志向と因子

平面志向	因子	第1因子	第2因子	第3因子	第5因子
1 独立続き間座敷		4	1		1
2 居間連続続き間座敷		2	4		1
3 独立和室+居間連続和室		3	4	1	
4 独立和室+大リビング		4	2	4	3
5 特大リビング				2	
6 独立大洋室					1

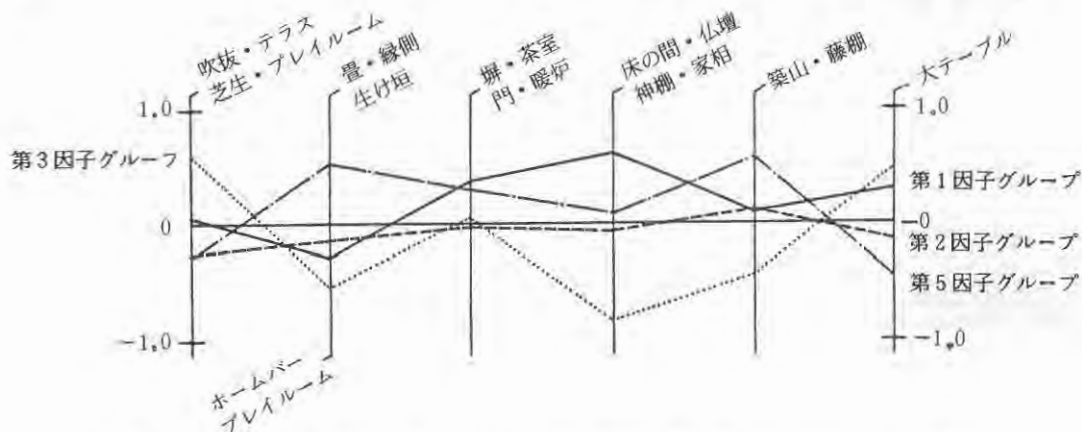


図10 外観認識による被験者グループ別にみた空間言語因子に対する因子得点の平均値

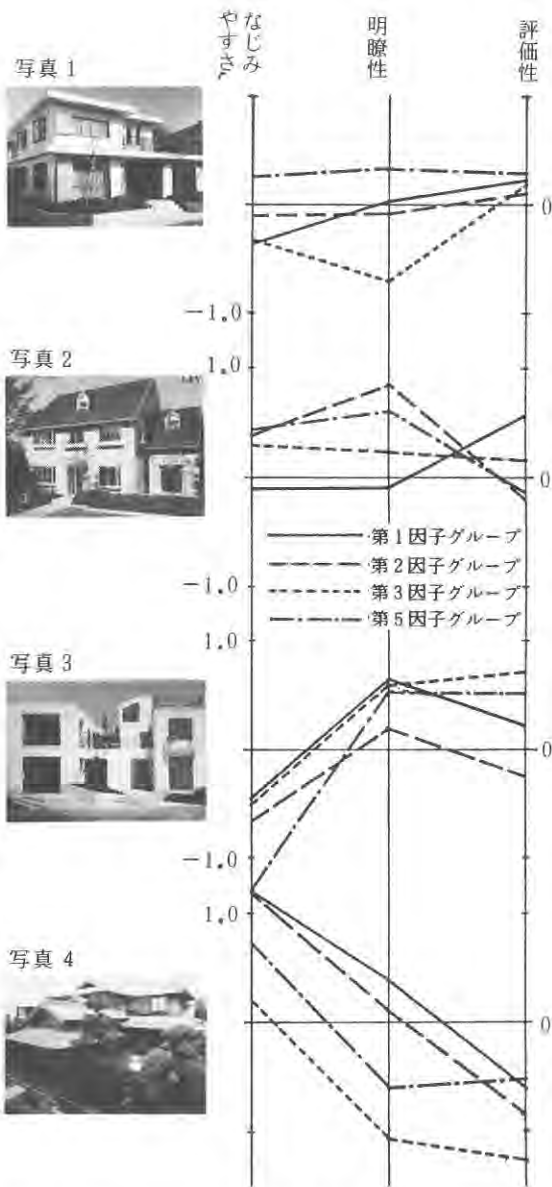


図-11 外観認識による被験者グループ別、写真別にみた形容詞対因子に対する因子得点の平均値

#### 4. ま と め

平面志向、空間言語の選択傾向、外観認識について相互の関係を検討した結果、相互に対応いあういくつかのパターンを抽出できる可能性が出てきた。それらのパターンを住文化類型とみるかどうかは今後の課題にゆだねることになるが、本稿では少なくとも3つの手がかりを得ることができた。

また、被験者グループの類分けについては、本稿では外観認識についての調査結果から試みただけにすぎないが、いくつかの被験者グループについて年齢的な特性が認められ、平面志向、空間言語の選択傾向、外観認識についてそれぞれの被験者グループに特有のパターンのあることが認められた。この点も今後の研究をすすめる上での手がかりのひとつとなるものと考えられる。

#### 註

- 1) 岡田知子, 富樫 穎; 住宅の外観イメージに関する研究 その1 企画型住宅を対象とした予備的考察「日本建築学会近畿支部研究報告集」(1987. 5)
- 2) 岡田知子, 富樫 穎; 住宅の外観イメージに関する研究 その2 企画型住宅を対象とした方法論的考察(1)「日本建築学会近畿支部研究報告集」(1988. 5)
- 3) 岡田知子, 富樫 穎; 住宅の外観イメージに関する研究 その3 企画型住宅を対象とした方法論的考察(2)「日本建築学会近畿支部研究報告集」(1988. 5)
- 4) 岡田知子, 平松陽子, 天野久子, 富樫 穎; 住文化に関する研究(方法論的考察) その2 住宅の外観認識についての検討(その1)「日本建築学会大会学術講演梗概集」(1987. 10)

(昭和63年10月11日受理)

#### Summary

This study is a survey that (1) the evaluation of impressions of exterior form, (2) the inclination of the connection between public space and private space (3) the inclination of 6 plan types, (4) the selectivity of languages of exterior and interior element.

As the result of the factor analysis, some patterns are extracted by three methods that the inclination of plan type, the selectivity of languages of exterior and interior element and the evaluation of exterior forms.